

先月は空思想を「十二縁起」から読み解いた。人生で迷いが生じ、渴愛が起こり、愛憎を体験し、執着してしまう根本は、無明が原因であった。無明とはすべては空である、私の存在さえ現象でしかないという無我を知らないことであった。無明を離れて空を知れば前編で解説した名称と形態、つまり言葉の与え方が変化し、渴愛や愛憎や不安から脱却できると学んできた。今月は龍樹の説く本当の意味における因果の法則について解説をする。くどいようだが、空を理解すると人生がとても生き易くなる。龍樹の説く空思想を、いくつかの例で振り返ってみよう。ここで、みなさんに設問がある。【設問：紙の上に鉛筆で書いた10cmの直線がある。この直線を短くせよ。だが線の一部でも消しゴムで消してはならない。】さあ、みなさんはこの設問に対して、どう回答するだろうか？回答はこのレジュメには敢えて記述をしないでください。空が理解できていると、比較的簡単に回答できる設問である。この設問でお伝えしたいのは長い／短いと云った概念は相対的な関係性に依るものだという事である。これは先月も先々月も解説した通りだ。仏教ではそのような相互依存関係を縁(えん)という。幸福／不幸、成功／失敗、高／低、有／無といった類は全て縁によって成り立っている。縁の詳細の解説は後に譲る。

ところで、みなさんは短気な資質を持ち合わせているだろうか。陰陽五行論でいえば庚、辛、車騎星、牽牛星は攻撃性で、ある領域の短気さを持ち合わせている。ここでは、ある領域という表現がポイントである。禅の有名な問答で、この短気さを扱ったものがあるので紹介しておこう。ある日、禅師の所に一人の僧がやって来て教えを乞うた。「私は生まれつき短気で、親からも注意されますが直りません。私自身も、これは良くないと思って直そうとしますが、これは生まれつきなので直りません。どうしたら直るでしょうか？」「ほう、そなたは面白いものを、生れつかれたのう。今、ここに短気があるか？あれば、今ここに、出しなさい。」「今はありません。何かしたときに、ひょっとしたはずみで短気が出ます。」「だとすれば、短気は生まれつきではない。何かした時の縁に依って、そなたがひよいと出したのだ。何かしたときに自分が出さなければ、どこに短気があるだろうか。そなたが自分の身を臍脰するが故に、何かの刺激に触れて自分の思惑を立てがって、そなたが自分で出しておいて、それを生まれつきと云うのは親に難儀を言いかける大不幸者ということになる。」この問答は、なかなか面白い事を伝えている。私たちは短気が「有る」と思っている。自分は短気な人間だ。それは欠点だ。その短気を直さないといけない。そんな思考が往々にしてあるかもしれない。その対象は短気だけではなく、愛情深い、勇気がある、美男美女だ、怠惰である等々、様々な内容が当てはまる。しかし空思想を理解していれば、それは間違っていることが理解できるはずだ。龍樹が説く本意の因果の法則を理解すると、短気や怠惰さや無能さや勇気や成果や愛情深さは、何かの縁に依って表象されるだけなのだ。十二縁起でも触れたが、人は不安から愚かな行為をし、不安な言葉を与え、概念化して苦悩するとお伝えした。不安が無ければ、そんな愚かなことはしない。さて、みなさんは人生において、不安があるだろうか。ある時もあるし、ない時もあるだろう。不安に関して有名な問答があるので、これも記載しておこう。勝利祈願をするときにダルマに目を入れる達磨をご存知だと思う。選挙のときにダルマに黒目を入れたりするシーンを見たことがあるだろう。達磨は禅師で南インドの人。中国に渡り禅を広めた禅宗の第一祖である。この問答は短いので原文を記載する。

《達磨面壁す。二祖雪に立つ。臂を断じて曰く、「弟子は心未だ安らかず、乞う、師よ、安心せしめよ。」達磨曰く、「心を持ち来れ、汝が為に安心しおわんぬ」》

達磨禅師は中国の少林寺で面壁九年の座禅をした。その達磨禅師を訪ねて一人の男がやって来た。後の第二祖になる慧可(えか)である。慧可は達磨に弟子入りを志望するが達磨はなかなか入門を許可しない。何故なのか、慧可は戸惑う。禅は師が弟子に親切丁寧に教えて伝わるものではないからである。自分自身で真理を掴み取るものだからである。冬に尋ねたので、慧可は雪の中に立っている。その慧可を放っておいて、達磨は壁に向かって座禅をしている。「何故、自分は入門を許されないのか…」慧可は

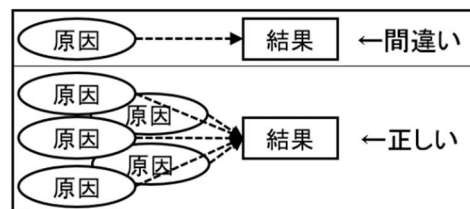
自問する。そして気が付くのである。「そうだ！達磨の教えは古い自分を捨てる事だ。」古い自分とは「既成概念」と換言してもいいだろう。私たちは悩みや苦しみを無くしたいと考える傾向がある。その為に仏教を学ぶ、陰陽五行論を学ぼうとする。それはそれで、きっかけとしては良いのだが、苦悩は消えない。それは仏教の真理や陰陽五行論を利用しようとしているだけだからだ。仏教や陰陽五行論や帝王学を学ぼうとしているのではなく、利用して苦しみを軽減しようとしているに過ぎない。そうすると仏教や陰陽五行論や帝王学よりも、もっと簡便に苦しみを軽減してくれるものがあれば、人はすぐさまそちらの方に飛びつくものだ。その在り方が根本的にズレているのだと、慧可は気付くのである。そこで古い自分(つまり既成概念)と決別したことを示すために、彼は自らの臂を切断したのだ。その臂を右手に持って、慧可は達磨に示した。切断された臂から鮮血がポタポタと雪の上に落ちている。その様を見て達磨は入門を許可したのだ。慧可は達磨の後継者となり禅宗の第二祖になる。「達磨面壁す。二祖雪に立つ。臂を断じて曰く」とは、そういう事を示している。勘違いして欲しくないのは、技術や知識を利用することが悪いと云っていない。短絡的な在り方に課題があると、お伝えしたいのだ。また真理を得る為には、臂を切断する必要もない。心意気を示している例題でしかないことを、理解しておいて欲しい。さて入門を許可された慧可は達磨に教えを乞う。「私の心は不安で一杯です。どうか師よ、私を安心させて下さい。」「では、その不安な心を持っておいで。そうすれば安心させてあげるよ。」「しかし、その心を探してみたのですが、何処にも見当たりません。」「じゃあ、安心させてあげたよ。」この問答は冒頭の短気の気持ちと同じ真理を説いている。私たちは、人生のある事象に対して不安だと思っているが、どこを探しても「不安」という実体は存在しない。ということは、「不安」は幻想でしかないのだ。不安が無いのだから安心だねと達磨は説いたのだ。

さて不安や短気は実体がないと解説したが、いずれも縁に依って生じたり滅したりする。縁の詳細は後に解説をする。今はみなさんが一般的に思い描く縁をイメージして読み進めて欲しい。何かの縁に依って不安になったり短気になったりすることを空という。縁に依って実体のないものが存在する例が沢山ある。例えば守護霊である。「守護霊なんて、居るわけない」と断言する方は間違っている。そうであれば空に虹があるわけではないし、真夏のアスファルトに蜃気楼があるわけがないからだ。虹も蜃気楼も光の屈折に依って我々に「見える」現象である。それなら、守護霊という現象が「見える」人がいてもいいのだ。見える人には見えるし、見えない人には見えないのだ。ただ、それだけの事である。そして守護霊が見える人には、守護霊は存在しているのだ。不安や短気だって、実体的に存在していないではないか。いや、あらゆる事物が実体的に存在していないのが空の思想であった。例えばガラスのコップが目の前にあるとしよう。私たちはそれを見て、ガラスのコップが実体的に存在していると思っているが、次の瞬間、それが床に落ちて粉々に壊れてしまえば、コップはなくなってしまう。そうすると、コップは今の瞬間、現象的に仮に存在しているに過ぎないのだ。実体的に存在している訳ではないという事を前編、中編でも学んできたはずだ。そのことを仏教では「縁に依って存在している」と云い、実体的な意味では空だと云っている。従って、「わたし」という存在も同様に、仮に一時的に縁に依って存在しているだけなのだ。私たちは誰もが、やがて死を迎える。「わたし」という存在が永遠不変に実体的に存在しているわけではないのだ。それを「無我」という。我というのは永遠不変の存在という意味である。その理屈からすると守護霊が見えるのも見えないのも縁に依って存在したり存在しなかったりするのだ。びくびくした心、傷付きたくない心、寂しい思いをしたくない心という縁によって、そういう心の持ち主には守護霊が出現するのだ。心がびくびくしていない人には、つまり鈍感な人には、繊細な心が存在しないので、縁がないので守護霊は出現しようがないのだ。だから、守護霊なんてあるわけないという思考は、縁や空思想の考え方からすれば間違っているのだ。誤解しないでほしいのは繊細な心、鈍感な心が良い悪いとは云っていないのであしからず。陰陽五行論的に表現すると晩年期の十二大従星が身強だと鈍感、身弱だと繊細な心を持ち易い。従って天将星のような強い守護星を持っている人には守護神は見え難く、天馳星のような弱い守護星を持っている人には、守護霊

が見え易いという理屈になる。守護霊が見える人には見えるし、見えない人には見えないと云うのが正しいのだ。まるで虹や蜃気楼が見える人と見えない人がいるが如くに。空思想とは、すべての現象は実体、つまり固定的ではなく、常に変化するという事を念頭に置いておくことだ。だから安心や安定を求めるのは空思想から論じると愚の骨頂なのだ。

ここからは後編のテーマである龍樹の説いた因果の法則(原因と結果の法則)を紐解いてみよう。原因と結果の法則を多くの方は間違っ
て捉えている傾向が強いようだ。ある結果はある原因から成り立っている。これは正しくもあり、正しくも無いのだ。換言するとある一つの原因がある一つの結果を生み出すと考えているのであれば大きな間違いである。例えば、あなたが大学入試で志望校に合格したとする、就職したい会社に入社できたとする、業務において大きな成果を作り出したとする、意中の相手と結婚できたとする、妊活をして子供を育めたとする、または成りたいポジションに昇格したとしよう。このとき、あなたは「私が努力したらからその結果を得たのだ」と考えるなら、つまり努力が成功という結果の原因と考えるなら、あなたは因果の法則を間違っ
て理解しているのだ。欲しい結果を得た人は、確かに努力はしただろう。でも、努力だけでは成功しないし、欲しい結果を得れないのだ。大勢の人々の協力があり、また好運に恵まれるなどの、様々な条件が積み重なって得たい結果がもたらされるのだ。その様々な条件を【因縁】と云う。換言すると偶然という沢山の要因が重なり合い、その結果を作っているのだ。努力した＝成果を得たという事は絶対にないのだ。逆説的に表現すれば失敗した人は努力をしなかった、または努力が足り

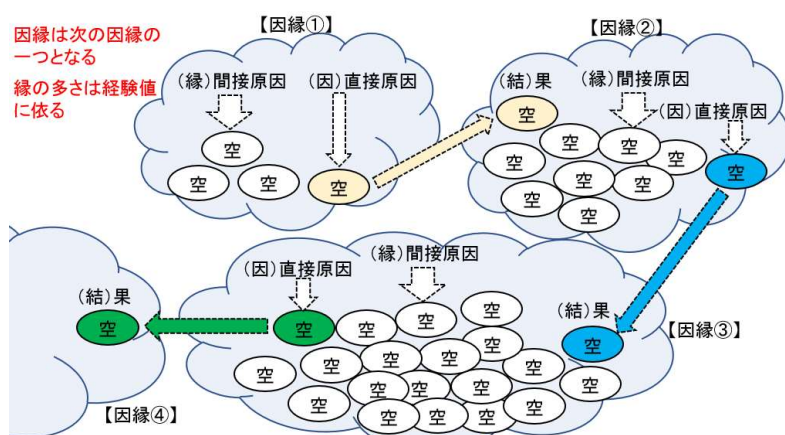
なかったという事になるではないか。本当にそうだろうか。努力をしたという直接的な原因はしたが、様々な諸条件の縁が足りなかっただけである。能力が100の人が平均点50の集団に入ると1位になり、平均点200の中に入ると最下位になる可能性があるのと同じだ。何か一つの要因では結果は生み出されないのだ。ここでまとめておこう。因果の法



則は複数の原因(因)が関係性を持って影響し合い、ある結果(果)を作るという事である。これが因果の法則の本意である。そしてその複数の原因は実態を持たず、常に変化する複数の原因が偶然に重なり合い、ある偶然の結果を作っているのだ。その結果も永続せず、常に新たな変化する原因に影響を受け続け、結果は変化し続けているのだ。これが因果の法則と空の関係である。従って常に同じ結果を得続けることは誰にも出来ないのである。同じように思えるだけで、常に違う結果を体験し続けるのだ。だからいつまでもこの幸せが続いて欲しいという思考は苦悩を味わう。いつまでこの寂しさや痛みが続くのだと云うのも間違いである。常に違う幸せや寂しさや痛みが来るだけで、同じものは二度と体験できないのだ。よく「若いときは二度とない」だから若いときに出来る事をしておきなさい、今の内に努力をしておきなさいと云う言葉を耳にすることがある。しかし中年だって二度とないし、老年だって二度とないのだ。若いときにしかできないことはあるが、中年にしかできないこともあり、老年にしかできないことがあるのだ。それなのに何故、若いときだけを云うのかというと、若い間に努力をして一所懸命に働いておけば、老後は楽になると勘違いしているからである。この思考は、因果の法則の勘違いである。若いときの努力は、その後の保証の原因の一つにしかならず、他の原因次第では全く違う中年や老年を体験するのだ。

ここで言葉の整理をしておこう。空とは変化する状態であるということ。十二縁起は、因果の法則を十二支分で表現した理論体系である。では因果とは何かというと、原因と結果には関係性があるという事である。前述したが、私たちが誤解しがちな一般的に理解している因果の法則、つまり原因と結果は、ある実体を持つ一つの原因が、直接的にある実体を持つ結果を創り出しているという思考である。これは間違っている。複数の空という原因が、空という結果を創り出し、その空という結果はすぐに変化してしまい、また次の結果の原因の一つになっていくのである。そこには連続性があり、連続性はないのである。だから努力をただけでは、人生は報われはしないのだ。努力はある結果を得るための空なる一つの原因でしかなく、欲しい結果を得るためには、努力以外の他の複数の原因が必要であるのだ。因縁という言葉が

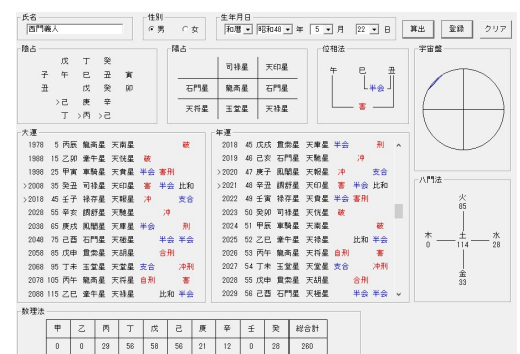
ある。因縁の因は原因の省略である。では縁(えん)とは何か。えにしとも読むが、縁とは間接的な原因の事である。よく縁がなかったと表現するときに使用されるものである。原因は直接的なきっかけとなる原因で、縁は間接的な原因の事である。因縁とは、直接的原因と間接的原因を合わせて表現した言葉となる。さて、この因縁がやっかいなのだ。因果の法則は複数の原因で構築されることを考察してきたが、私たちは直接的なきっかけとなる原因だけを探求して、間接的原因である縁を無視してしまう傾向がある。これが苦悩の原因となるのだ。直接的な原因だけを解決しても、間接的な複数の縁を改良しなければ、結果は変化しないからである。この論理が理解できていないと自分や人を断罪してしまうことになる。私の人生が上手くいかないのは私が怠惰だからだ、彼が成果を上げられないのは無能だからだとなる。確かにその直接的な原因はあるだろう。しかし怠惰であろうが無能であろうが、世の中には上手くいっている人もいないではないか。直接的な原因はその結果を得る「きっかけ」でしかないのだ。大河の一滴に過ぎないのだ。大河になるためには沢山の支流が集まって大河を形成する。その一つだけに着眼しても木を見て森を見ずになってしまうのだ。間違っているのではないが、視野が狭いので正解でもないのだ。無能な人間があるとき突然に有能になるときがある。今まで上手くいっていた者は、あるとき突然ダメになるときがある。これは間接的原因である複数の原因、つまり縁によるものである。この縁は有形と無形に分かれる。有形な縁は直接的原因である因と同じレベルのことが多い。努力、配慮、積み重ねた営業、自制、律した生活、コツコツ積み上げた勉強等だ。無形な縁はその名の通り現世以外の大いなる流れによるものである。先祖からのご加護、自分で今世に縁を結んだ師匠縁や仏縁、家系の縁などである。これらの有形無形の複数の縁と、結果を創り出す「きっかけ」となった直接的原因が重なり合い、ある一つの結果を作るのだ。



私事になり恐縮だが、私たちベイグループが学歴や職歴をあまり重要視していないのは、学歴や職歴は、一つの縁でしかなく、それでその人材の有能無能さを図ることは出来ないからだ。中卒であろうが大学院卒であろうが、ダメな者はダメだし、出来る者は出来るのだ。因縁の特に縁によって結果が左右されてしまうのだ。では縁はどうやって引き寄せるのか。それは今この瞬間の在り方で引力が発生し、複数の縁を引き寄せるのだ。引力はどのようにして発揮すればよいのか。学理を勉強していればすぐに理解できると思うが、土性本能である。土性は引力本能を司り、十干だと戊己、十大主星に変換すると禄存星と司禄星になる。つまり引力を発揮するには、自分の事は一旦脇に置いて(無我の状態となり)、目の前の方にお尽くしする在り方を常に意識する事である。帝王(社長、リーダー)たるものは、心配り気配り業であるとした陰陽五行論の格言は因果の法則とも合致する。如何に目の前の方に喜んで頂けるか、如何にお役に立てるか、どうやったらお尽くしできるか、どの様にその方に寄り添っていくのかを常に念頭に置きながら生きていく事が複数の縁を引き寄せるポイントとなる。その縁が飽和量を超えたとき、その次の縁が原因となって因縁となり因果の結果として人生に表象されるのである。このメカニズムが理解できれば、如何に自分が利益を上げるか、得をするか、有利になるかを考えるのは愚の骨頂であることが理解できるはずだ。人生の本質はパラドックスであると何度も説いてきた。まず自分を満たしたければ、他者を満たしなさい。結果的に自分の人生に複数の縁が積み重なり成果として結果を得るのである。理屈が分かれば、あとは簡単である。実践すればいいだけである。営業職の者であれば、何度も営業を積み重ね、目の前の方のお役に立つ縁を飽和量を超えるまで、結果として人生に表象されるまで、縁を積み重ねればいいだけである。努力が足りないのではないのだ。無能ではないのだ。ほとんど多くの方が人生を誠実に生き、努力している。多少の怠惰さはあったとしてもだ。だから結果が出ないことを無能だからだとか、

この組織に向いていないとか、私には価値がないと原因探求する短絡的な思考から、早く脱却する事である。何年掛かろうとも、結果が出るまで他者にお尽くしする縁を積み重ねればいいだけなのだ。その間、他者から笑い者にされようが、どう評されようが淡々としていればいい。縁の積み重ねが多い者は何かをやり始めると1週間で成果が出るかもしれない。縁の積み重ねが足りない者は成果が出るまで10年は掛かるかもしれない。成果がすぐに出ない者は、過去の積み重ねの人生の中での、因と特に縁が足りないだけなのだ。誰にでも無限の可能性があるので。だから私は「これは私には出来ません」と云ってくる他者をみると、「やる気がないのね」と思ってしまう。今、力量が有ろうが無かろうが、出来ようが出来なかりが、縁を積み重ねる姿勢を見せる在り方が大切である。私は他者の内面にその領域を見出そうと意識をしている。出来るかどうかはどうでもいい。出来るようになる意識を持ち、出来るまで縁を積み重ねれば誰でも結果を得ることが出来ると、龍樹の因果の法則は教えてくれているからだ。みなさんの中で私は無能だ、私は上手くいっていないと思っている方もいるかもしれない。そんな方々は因縁のメカニズムを理解して欲しい。リーダーや経営者の方々は部下や他者をたった一つの原因だけで判断しないことだ。それは大きな判断ミスを起こしてしまうからだ。

別の視点から論じると、縁が飽和量を超えるためには数理法が役に立つ。宿命表の一番下に表記されている総合数である。この数値が少ない者は少しの縁の積み重ねで結果が出易い。だから大経営者は総合数値が少ないものが多い。大変なのは八専(干支番号49~60)の強い干支を宿命に持ったものである。八専の干支の全員が対象にはならないが、八専の干支を保有すると比較的大きな総合計数値になることが多い。すると積み重ねる数値も、他者の何倍もの縁を積み重ねなければならない。合計数値が300を超えている方は、もう筆舌に尽くしがたい。だから、他者に比べると不器用であったり成果がすぐに出なかったりする場合も多い。私の会社に西門義人という社員が居る。彼は全干支が八専だ。年干支:癸丑(50番)、月干支:丁巳(54番)、日干支:戊午(55番)である。陰占内に干合と連唐干支を持ち合わせ、つい自分に甘くなってしまう、悪い意味で諦めが早く、独りよがりの傾向が出やすい傾向が宿命内にある。そんな甘い意識でも生きていけるくらいの絶大な力量の宿命を保有している男性だ。つまり才能の塊の存在である。総合エネルギーが260もある。別の表現をすると、不器用の塊のような存在でもある。ただし社内の特に宿命がよく読める仲間からは、陽転した時の西門が社内で最も陽転すると知られてもいる。西門にはずっと、「お前は不器用なところがある。ただし不器用さはコツコツ積み上げるための特権だ。」と、私は言葉をかけている。何をコツコツ積み上げるのか。目の前の方の心情に寄り添い、お尽くしする縁を積み上げるのだ。総合エネルギーが大きいから飽和量を超えるまでに何年も掛かるだろうが、腐ることなく心を折らすことなく、精進せよと伝えている。ちなみに彼の大運を観ると2008年~2017年までの10年間は主星:司禄星、従星:天印星である。コツコツと積み上げて目上の者から引き揚げてもらう10年だ。そして2018年からの10年間は主星:禄存星、従星:天報星である。大きなチャンスとお金と人脈を天報星が如く無限の広がりを作り出す10年となる。注意点は現実星的人脈や資金を動かす禄存星に対して身弱の天報星が組み合わさっているので、心がコロコロ変わってしまい意志薄弱になると陰転する。天報星は核が無く、無限の可能性を保有しているので、自我を捨てて、自分のやり方を捨てて、自分の正しさを捨てて、捨て身で生き出していくと大きなお金と人脈を動かす存在として活躍する。どんな結果にも原因がある。西門の場合は、上記した原因を如何に縁として積み重ねていけるかで活躍するかしないかが決まっていくのだ。みなさんも自分の宿命を観て欲しい。あなたの原因がその宿命表に記述されている。どんな因縁を創るかで人生体験が変わっていくのだ。陰陽五行論には(宿命+環境)×在り方=運命という法則があった。どんな固定的な先天的宿命を持っていても、自分の在り方(生き方、思考方法)次第で後天的に加わる因縁



は大きく変化して、人生体験が無限の可能性を発揮していくのだ。私はこの理論に出会って、人生が大きく変化した一人だ。実体験から、この因果の法則、宿命の因縁の大きさを感じている。そして誰にでも因縁をコントロールすることが出来るのだ。本意の因果の法則のメカニズムが理解できれば、縁を積み重ねる引力本能を、つまり他者への心配り気配りを積み重ねればいいのだ。

話を元に戻そう。因縁である。直接原因と間接原因があり、往々にして直接原因しか見ない傾向があり判断をミスしてしまうと解説をした。ある結果は、必ず原因を伴うが、その原因は複数の空なる直接的および間接的な原因が複合的に創り出したものである。だから直接的な原因だけを探求してはならない。それは、その結果を創り出した「きっかけ」でしかなく、他の縁の要素も改良しないといけないのだ。ここまでは前述したとおりだ。では複数ある他の間接的である縁を、どのように改善すればいいのかが問題となる。その解決方法は、ボーッと眺めておくことである。何とかしようとしなくていい。「縁が無かった」と受け入れるしかないのだ。有形無形の縁を、一人間の意図ですぐに改善など出来ないのだ。だから善き縁を頂くためには毎日毎日、薄紙を積み重ねるが如く、引力本能を発揮することで縁をつないで、それを何年も積み重ねるしかないのだ。つまり縁の改善は即効性のある方法は存在しない。何年もかけて縁を積み重ねるのだ。営業も半年間で1回しか訪問しない者と、100回訪問しても、まだ縁を繋ごうとする者が居る。営業成績や人生体験の差は、単純に縁をコツコツと繋ぎ続けたかで決まる。だから誰にでも出来るのだ。誰にでも出来ることは有能な者や、意識の高い者しか実践しない。凡人ほど、何か突拍子もないことをしないと人生が良くならないと勘違いしがちだ。誰でも出来ることを、毎日コツコツと積み重ね、それを何年も積み重ね続けられるかで、人生体験が変化するのだ。だから人生で体験するすべての現象はボーッと眺めるだけでよいのだ。上手くいかない結果を得たら、縁が無かったと、受け入れた方が人生が上手く廻り易いようだ。如来は何故、半眼の目をしているのか、私たち衆生の悩みを「そーなんだ、苦しいんだね」と、ボーッと受け入れてくれる存在だからだ。だから願い事は如来にしてはいけない。願いをボーッと聞いて受け入れてくれる存在だから、願いを訴えても叶えてくれないからだ。座禅をするときも半眼にするのは目から入る情報量を少なくして、周囲からの刺激に翻弄さえないためである。願い事は煩惱の塊である天部や明王に依頼すべきだ。毘沙門天様や不動明王様だ。嫉妬されるという危険性もあるが、願いはすぐにはかなえてくれる。毘沙門天様も不動明王様も、目をカッと見開いて、私たち衆生を睨みつけているのではない。だから彼らも苦悩しながら衆生を救おうとしている存在なのだ。だから人生を安寧に生きたければ、目を見開いて他者を見てはいけない。欠点が浮き彫りになり怒りや嫉妬や寂しさのような渴愛が生まれてしまうからだ。見なかったことにする、聞かなかったことにして、現象は見ているがボーッと眺める程度の生き方が安寧の人生となるそう。私は半眼にできず、目を見開いてしまう傾向が強いが。。。これも業のなせる所業である。苦しみたくなければ、縁の原因探求はせずに、縁が無かったと受け入れ、次は善き縁を繋げますように、引力本能を発揮して生きるのが最も安寧に生きる早い方法である。

人生体験は間接原因の縁によって引き起こされ、ある縁がきっかけとなって原因となり結果を作る。だから何が原因でダメだったんだと自他を追及すると人間関係が壊れる。自他ともに傷ついてしまう。そんな苦しい生き方をするよりは、今後、より良い結果を得る為の縁作りをした方が効果的だよねとお伝えしているのだ。嫌な体験をしたことは仕方がない。縁が無かっただけ。クヨクヨ悩んで直接的な原因探求や犯人探しをして、怒りや嫉妬や悲しさにさいなまれる時間を作るくらいなら、次の善き縁を作る努力をした方が、人生をより善く効果的に生きれるよね、とお伝えしたいのだ。落ちた花卉は元には戻らない。あ一つ、花が散ったなとボーッと眺めて受け入れて、次により美しい大きな花を咲かせる縁を作りなさいと云っているのだ。人生は因縁で決まってしまう。言葉の与え方による概念、そして因果の法則を理解すれば、人生の苦しみから脱却し、豊かな人生を体験できますよと龍樹の空思想は私たちに教えてくれているのである。3編に渡る空思想の解説はご理解できただろうか。。。。